

## 抗がん剤をやめられない話

手術を受けるには、体力や持病によりハードルが高いことはある程度知られています。再発がんの治療には抗がん剤が用いられることが多いです。いまでは延命効果が期待できる治療や、分子標的薬など狙い撃ち効果が期待できる薬剤も増え、選択肢が広がりました。治療のオーダーメイド化は今後進むことでしょう。この抗がん剤も、意外とハードルの高い治療であることは案外理解されていないように思います。平たく言うと、本来抗がん剤はピンピンしている患者さんにだけ使用するものです。

一般的には、PS(Performance Status)という5段階の「元気さの目安」があり、この目安で0~2、つまり日中の半分くらいは立ち歩いて生活できる、あるいはもっと元気な人だけが抗がん剤の治療対象になるというのが世界の常識です。抗がん剤というのはそれくらい毒性が強いくすりなのです。

しかし、実際には多くの病院で「希望を失うとかわいそう」「腫瘍マーカーの値だけでも小さくなれば」「まだ試してみる薬がある」「抗がん剤をやめるのが怖い」といった色んな人の心配や善意から、大変弱られた状態の患者さんさえもが抗がん剤の治療を続けておられます。もちろん、患者さんそれぞれに事情はあるので一概には言えませんが、抗がん剤は決して思いやりや希望のためだけに投与されてよい薬でないことは確認しておきたいところです。患者さんと主治医とが、適切な「損得勘定」をバランスさせる作業こそが、より満足感の高い治療につながると思います。これまで日本の文化が、そういったやり取りを重んじてこなかった歴史が背景にあるのではないかと感じています。